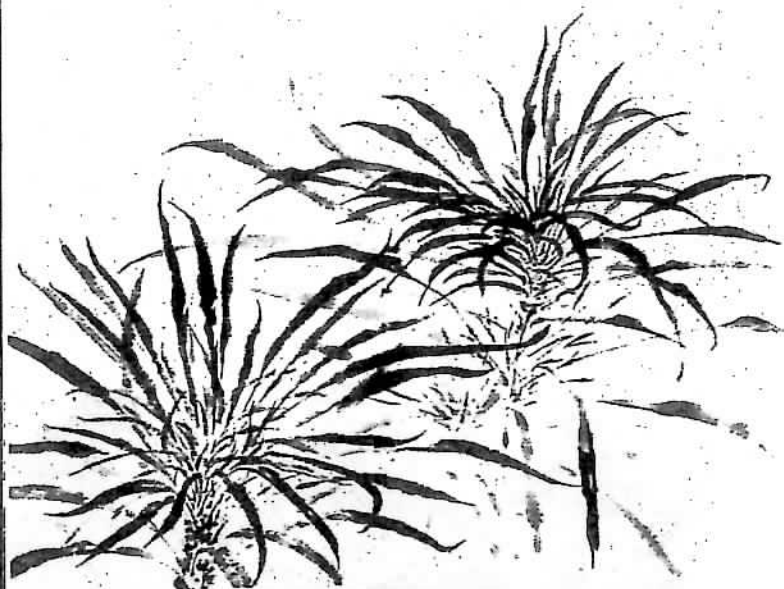


山形県民教連通信 No.50



目次

一. 2012 山形県民教連

「冬の学習会」

3.11 を学び合い、語り合いました

○ 会長あいさつと基調提案

○ 分科会報告

生活指導と教育

算数数学と教育

理科と教育

社会科と教育

○ 全体講演

「3.11とこれからの教育再生」

資料 国語科通信

二. 私と民教連

みなさんのご支援の
おかげで50号です。

二〇一二年 山形県民教連

『冬の学習会』

三・一を学び合い、語り合いました。



二〇一二年は記録的な大雪と寒波で年が明けましたが、その厳しさがつづく一月一四日（土）に県民教連「冬の学習会」が開催されました。

テーマは「三・一とこれからの教育」です。

三・一は大震災からの復興とは、「三／一以前の学校」へ戻すことなのでしょう。私たちは、これまで安全神話を信じ込まされ、真実を見抜く力を奪われてきました。また、競争・効率化優先の社会の中で、温かい人間性を育む社会環境を壊されてきました。今こそ、災害からの脱却だけでなく、人間の復活・人間社会の復興を考えなければなりません。そのための教育をどうするか、地域や父母とどう手を結んでいけばいいのか、考え合い話し合いました。

会場は、今回はじめて山形市の「まなび館」を利用して頂きました。旧山形一小を改造した館で分科会会場として、広さ、あかるさ、暖かさで申し分ありませんでした。

早坂会長の

あつたつと其語能給

新年明けましておめでとうございます。昨年は未曾有の大震災にみまわれ、沿岸部や福島については、未だ復興にほど遠い状況にあるようです。そんな中で、いつもの日常がいかに大切なのか思い知る一年でした。

そこで『希望』の見える新しい年になればと願っておりますが、『消費税増税』や『公務員給与削減』などの声を聞くに愕然としてしまいます。

しかし、それが道理にかなうものなのか、社会保障の為といながら今までも平気な顔で年金や医療の改悪をしてきました。今回も改悪がセットになっていきますし、法人税減税・米軍思いやり予算がそのままでは、まやかしであることがわかります。案の定、政府が民主党に提出した内部文書に、く防衛費や公共事業にも使うととなっていたというのですから、国民を欺いて進めようとしているわけです。

このことは、『子どもの権利条約』批准でも言え



ることで、日本政府に対する勧告が出されたのは1998年、2004年に続いて3回目になり、実施状況に関する日本政府の第3回報告を審査していた国連の子どもの権利委員会は、前回勧告の「大部分が十分に実施されていないか、まったく対応されていない」ことを指摘しています。

そして「過度に競争主義的な環境による否定的な結果を避けることを目的として学校制度および学力にかんする仕組みを再検討すること」など2010年に勧告し、教育について教育制度が『高度に競争主義的』であり、「いじめ、精神的障害、不登校・登校拒否、中退および自殺につながる

ることを懸念する」と述べています。

しかし、この勧告を国民どころか教育関係者にも知らせることなく、3回目の勧告後の新学習指導要領でも、内容と授業時数をさらに増やし過密な教育課程を押しつけてきましたから、この勧告を真摯に受け止めていません。子どもの権利条約に対する日本政府の姿勢が改めて問われることになりました。

また、新学習指導要領では原子力発電は安全だとする指導目標を掲げ、その副読本もネットで紹介されていますが、3月11日の震災後に配布が見送られ訂正されることになりました。

このように都合の悪いことは隠し、都合のいいように『やらせ』や情報操作を行う日本政府のやり方は、中国や北朝鮮を批判できるものではありません。

アメリカと財界の言いなりになっている政治は、原発問題からも見えてきました。電力不足を理由に原発稼働と推進をまたもや進めようとしています。原爆を受けた広島島の記念碑にある「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから」という誓いを、私たちは今度こそ言葉だけのものにしたくありません。子ども達の未来のために、そして人間として核のない世界を目指していきま

よう。

さて、新年にあたり民教連運動について3つの提起をさせてもらいたいと思います。今回の総会でも論議をしながら1年かけて全体のものになればと考えています。

1つ 今を学ぶ教育実践を子ども達と創造しよう。

ここ最近、実践レポートが出にくくなっている現状があります。教材研究もままならない忙しさの中で、校内授業研や官制研修での報告におわっていないでしょうか。教職員である以上創造的な実践は、『生きがい』や『やりがい』であるはずです。

教科書に教える内容が書かれてあっても、目標を達成するためには、今を生きる子ども達に今を学ばせなければ未来を開くことはできません。

今回の震災で、今を学ぶことを避ける傾向がありました。しかし、宮城県教連はいち早く子ども達や教職員の思いや願いを1冊の本にしたためました。配慮という言葉で実践を恐れ、子ども達の考えや成長にふたをしてしまうことのないようにしなければなりません。

2つ 地域の中で学び育つグローバルな教育を追求しよう。

子どもの生活台である地域で学び育つ教育は、特に山形県は今でも継承されています。しかし、少子化や過疎化を

楯に学校統廃合が急速に進み、地域を失う現実が出てきました。それを緩和しようとする学校・教職員の努力は大変なものです。

地域を学ぶには、小さな単位から始まるのが地域を学ぶ基礎になります。このことは、地域で起きている何気ない日常的な生活が、世界と日本で起きていることと密接につながっていくことを西村山の中学校教師であつた渋谷清氏の実践で明確になりました。

グローバルな時代だからこそ、ローカルな中で育つ子どもが現実を見つめる中で、世界の中で活躍できる人間教育を進めていかなければなりません。そんな意味でグローバルな教育という言葉を使わせてもらいました。

3つ 実践を交流し応援する場を民教連として設け広めよう。

せつかく苦勞して実践しても、それが1人だけのものでは、次の実践の意欲にはなりません。ひとりよがりなのか、どんな価値があるのか、みんなです。検証することで次の実践につながっていくのです。価値のある実践が広まれば、多くの子ども達の目を開かせ、学校さえ変えていく原動力になるはず。

民教連として、そんな場を行事的にこなすのではなくサークルの開催とともに授業公開など継続的

に行えるようにしたいものです。

そして、今回50号を迎えた民教連通信は、3つめの提起である実践を交流し応援する役割を果たしてきたもので、編集局長の多田眞敏先生の献身的な役割にみんな感謝したいと思います。50号という10年を超えての継続を喜ぶと同時に、今後みんなを支える通信にしていけるよう会員皆様のご協力もお願ひしなければなりません。



分科会報告

※生活指導と教育



テーマ「日頃の悩みや心配、不安を出し合い、話し合いましょう。」

レポート あえて設定しませんでした

話し合いの概要

参加者の現場の様子についての思いについて紹介し合った後、以下の二点について、自由に話し合った。

1 新学習指導要領に対応するのに大変で現場は、非常に混乱している。

小学校では、新学習指導要領の内容が多岐にわたり、時間がいくらあっても足りない。学活まで算数をしている自分に愕然とする。

何かを削減しないと子どもの生活が教室に縛られてしまう。「放課後」という言葉が死語になりかねない。

しかし、週五日制になったときにも、「削減」の大合唱が起こり、子どもたちの自己決定の場までもが、削減されてしまった経緯がある。この期に及んで、さらに何を削減するというのか？

校長が、各部や学年に削減できるものを考えるよう指示をした。先生方の休みを減らしたくないという。

しかし、これまで子どもが話し合ったり、考えたりする時間を確保し、それなりに時間をかけてやっていた運動会を教師主体の運動会にしてもいいのではないか、その方が効率的だ、といった議論も出てきている。

このように削減が、ただ単に効率性、生産性の観点からのものであってはならない。

「学校は人間を扱う場所だ。・・・生徒の個性を尊重するためには、個性ある教師の存在が不可欠だ。というのも、多様な個性を守ることができるのは多様な個性だけだからだ。

・・・個性を尊重するということは、言葉を換えて言えば寛大さのことだ。教師は、寛大に辛抱強く成長を待たなければならぬ。そのような待機と教育の場である学校は、成長過程にある人間のばらつきについて、原理的に寛大であらねばならない。と、同時に学校は、教師の人間性について、ある一定の寛大さを持つて臨まないといけない。理由は単純。

抑圧された人間は、自由な人間を導くことはできないからだ。

(日経ビジネスオンラインより 自称引きこもり系コラムニスト 小田島隆)

○子どもの自己決定の場を削減してはならない。
 ・・自治活動を削減してはならない。

○子どもが自由に過ごす時間、教師と子ども、子どもと子ども、教師と教師が対話できる時間を減らしてはならない。むしろ、増やしていくぐらいの気構えで何を削減していくか、考えていく必要がある。

教科の指導計画については、この余裕のない新学習指導要領を、年間を通して無理せず、子どもたちに考えさせながら実施した実践例（指導要領の内容の取り扱いの軽重、指導時間数等）をぜひ、民教研全体でまとめてもらいたいものだ、まとめていくべきだ・・・という意見が多数出た。

2 人間関係がうまく作れない子どもたちについて

小学校中学年で、突然「○組に言いたいことがあります。」といって隣のクラスの子どもが教室に入ってきて、やめてほしいことを 大きな声で訴えた。

担任（参加者）は、その突然の訪問に驚いたが、訴えを認め、それに対するクラスの子どもの意見を聞いた。当然反論もあり、何度かのやりとりの中で、自分たちが「なおすべきこと」、「納得できないこと」が浮き彫りになってきた。



分科会では、突然の訪問にも関わらず、双方の言い分を何回かのやりとりの中で整理整頓し、お互いが理解し合う端緒を作った臨機応変な対応として、担任（参加者）の機転を素晴らしいと思った。

しかし、隣のクラスの担任からは、「どうして子どもをすぐ（私の教室に）返さなかったのか」詰問されたという。

隣のクラスの担任は、自分のクラスの子どもが、○組で訴えることを知っていたし、むしろそれを指示している。ということとは、隣のクラスの担任は、ただ、「不満をぶちまけて帰ってくること」を指示していたことになる。

小学校低学年から、チクチク言葉、フワフワ言葉、あったか言葉といった心を表現する言葉を規定し、徹底し、「気持ちよくなる言葉」を発することを評価する（植松氏はそれを「心理操作主義」と呼んだ）。

それは、逆に言えば、他人の不正義を批判したり、

自分や仲間の利益のために言論で戦うことを否定することにつながる。

さらには、事前に「トラブルを避ける」という大義名分のもと、はじめから人と人との関係を希薄にし、他人に対する興味関心をあまりもたない子どもを育ててしまっているのではないかと？という意見もあった。

トラブルや不快なことがあっても、自分の主張を述べるだけ、相手の主張を聞くだけ。「だけれども・・・」という反論や相手の気持ちを理解して歩み寄る、などといった言動になっていくことを想像もできない子どもと教師。

自分に不利益なことがあっても、自分で訴えず、すぐ担任に抗議してくる子ども

それを受けて、自分で子どもの心を（出来もしないのに）操作しようとし、（出来もしないのに表面上）管理し、（出来もしないのに表面上）トラブルを解決してやれる教師。しかもそれが管理職から評価の高い教師であると思いついでいる管理主義を管理主義とも感じない無自覚で鈍感な教師。子どもの行動の裏にある心の状態を読み取れない教師。読み取ろうとしない教師。

子どもたちの自治を奪い、子どもたちの自立への学びを奪い取っている学校の状況。その自覚もなく、学校の職員室にこもって、自分の目の前の

仕事を能率的、効率的にこなすことこそ優秀な評価の高い教師だと思いついでいる「サラリーマン教師」が今後無自覚的に増えていくことを危惧する意見が相次いだ。

何でも「評価」「評価」「評価」。そうした状況の中でも、同僚とのそれなりの「納得と合意」を前提（一人原則を叫び孤立するのではなく）としつつ、子どもの目の輝きと笑顔こそ教師に対する最高の評価だということを自覚し、子どもたちの自治活動を柱にした生活指導教師として実践を重ねていくことがますます大事になってくる。

※ 算数・数学と教育

テーマ「算数的活動はどうあるべきか」

レポート 芳賀雅尋「入門期の算数」（講座）

山川貴子「算数したいvol.16（特別支援）」

早坂久佳「いい加減覚えてちょうだいR編」

話し合いの概要

①5-2進法（5までの合成分解・5までの加減↓5と1で6） 数を多面的に捉え、数の感覚を豊にと考えたとき、6はもともとバラバラ↓5と1で6（5をまとめる有効性）↓いろんな6

どちらが先か議論した。

②特別支援 一人ひとりの子どもあわせた指導（要求に



合わせた)しかし、振り回されてしまうので⑩ずつ列べたり、⑤でまとめ(かんづめ)たりできるようにする目標を持つことが大切。そのための位の部屋は最初から入れていくなど大事なことはおさえない。

マツチング(対応) 5・6歳スタートラインで確認する。

具体物 色で塗りつぶす→モノを捨しようし、個数にもっていく。

数えた結果がこたえです。↓とぼしい

③等算の素過程は2位数の中でやっていける。

ふえたと思わない、まちがいのないタイトルの書き方を考えよう。

※ 理科と教育

テーマ 「理科は誰だつて楽しくできる」

レポート 鬼島悦雄「月や星のうごき」

講座 「教科書をバッチリ解説」

「授業で使える物づくり」

講師 丸山哲也先生

話し合いの概要

① 「月や星の動き 4年」シロウトでもできる天体教材づくり(デジカメを使って)。学校のグラウンドで撮影した夏の第三角形、カシオペア座などの動きが分かる映像を使った実践。

② 6年電気の学習をどう進めるか。

丸山先生にさんかしゃのきぼうにあわせて、今から授業する3学期の「電気」のすすめ方について教えて頂いた。

③ 磁石(ボードに使うマグネット)での遊びの紹介。マグネットを使ったキツツキのおもちやの紹介。

※ 社会科と教育

テーマ 「3.11大震災・福島原発事故と子どもの目」
レポート 田口忠宣「目指す社会科教師像とは・・・」

多田真敏「原子力発電と教科書」

分科会基調提案

1, 3. 11後の社会科の実践

○いままでの実践をどう変えたか

○そのことで、どんな悩みや困難に直面しているか。

○大震災、原発事故後、特に強調されなければならぬことは、

「主権者である国民は「政治力」を強化することによって、初めて「安全・安心の社会」を構築することができる。そのことを教える教科は社会科が中心となるべきである」

2, 「政治力」を強化するために、戦後の歴史を再学習すべきです。

○どこから始め、どこに焦点を合わせるべきでしょうか。

○「地域に根ざす」はどんな役割を持つのでしょうか。

3, 「これからどう生きるか」の問いは、被災者だけでなく、すべての人々への問いです。

従前の認識や価値観を再構築すべきでしょう。

○そのために、どんな教育活動や教育実践をすべきなのでしょう。

○モノ・カネ優先、そのための競争、効率の「無機教育」から「有機教育」へ（太田）

をどう進めれば

話し合いの概要

①田口先生は、山大の臨時講師として「地理・歴史科授業法」の講座を担当し2年目。90分×15回。講座が終わりに近づいたので「目指す社会科教師像」をレポートしてもらった。

「学習材の研究を怠らない教師」「“生きる力”をそだてる。」「世界的な視点から考える」「生徒と同じ目線で考え、自分の哲学をもつことで、生徒の可能性を引き出す。」「子どもにとって“キャッチャー”であること、“提供する側”提供される側」の構造でない、共に考える姿勢で」「真実を教え、2度と戦場にいかない平和・・・」等々が述べられていた。

この意欲がもつともつと固められ深められる学校現場であってほしい。受け入れ側の問題が深刻だ。教師間の実践に基づいた話し合い、自由な教材研究の保障、子ども観の持ち方：等々が若い教師の関りにほしい。

②福島原発事故にあって強く思うことは、

i 私たちはヒロシマ・ナガサキを本当に学んできたのだろうか、「放射能」一つとつてもあやふやで学びが浅かった。“爆”ではいけないが“発”なら許される、意識はなかったか。

ii 安全神話を許さない“科学力”“政治力”が何故国民

の中に育っていなかったのか。特に“政治力”を問題にしなければならぬ。戦後の歴史を真剣にやっつてこなかったツケだ。

原発は、政治的・経済的国民支配の下で五四基も築造させ、教科書は、文化・思想面の攻勢で“つくる会”教科書を採用増にさせた。両者ともアメリカの世界戦略の中に位置づけられているという共通点がある。戦後史を再学習するときのポイントにする必要がある。

Ⅲ大震災を受けて、改めて地域の絆の強いこと、必要なことが再認識された。特に、東北が強いことは、東北の中央に対する激しい抵抗、激しい自然の中での生産向上等々の歴史に由来すると思われる。さらに最近、とみに挙げられている絆は、子育てや高齢者のためのもので生活的なものが強く押し出されている。抵抗や生産面で造成された絆と生活面で生まれたものとはどこが同じでどこがちがうのか。

これらの史点を明確にすることが“地域に根ざす”ことにつながると思われる。

全体講演

「3.11とこれからの教育再生」

～競争・効率の教育から支え合う、

真実を見つめる教育へ～

講師 森 達 氏 (宮城県荒浜中教員)

3.11は、氏の勤務する亘理中の卒業式であったという。卒業式が終わって生徒を帰して、着替えのために鳥の海潟(亘理町の海岸)に近い自宅に戻ったときに大震災に遭遇した。その時の救助されるまでの生々しい体験、避難所のような話をされた。

その上で、転勤させられた(宮城県教委はこの混乱期に人事異動を強行した)荒浜中が学校を再開させるまでの様子、

そして、生徒はどんな

状態でどんなことを思い何を考えたのかを、講師が準備してくれた資料、それに第三学年国語科通信「港のある街」で克明に話してくれました。

その資料と通信の要約を次に掲げます。



1. 3・11をどのようにして迎えたか ― 危機一髪の避難

○ 森健輔写真集「互理町荒浜～東日本大震災一ヶ月の記録～」(2011. 9. 30発行)より

3月11日、昼寝をしていた私は轟音と突然の揺れで目覚めることになった。寝ぼけ眼で、とても長い揺れに感じた。自分が何時に目覚めたのか、後にそれは14時49分だったことを知る。

15時12分、水位の下がった港。

15時33分、土手。地割れしている。

15時50分、阿武隈川河口。黒い波が逆流してきている。

15時57分、津波到達。荒浜中学校2階及び3階より撮影。

水浸しの町を歩いて避難することは困難であるため、そのまま夜を迎えることになった。停電で真っ暗だったが、満天の星空が綺麗だった。真っ暗で水浸しの町を、互理消防署の方々が緊急を要する患者を救助にやってきた。その明かりに気づいた、避難所に間に合わなかった人たちの、「助けて」の声が暗闇に響いた。

寒い一夜を乗り越えて。教室に全員は入れないので、私は廊下で一晩を過ごした。

中学校でもう一晩過ごし、3月13日、自衛隊のヘリに乗って脱出した。

3月15日、荒浜消防団に同行する。小学校を出発。土手を海岸へ歩く。土手の手すりは吹っ飛び、道路のアスファルトも剥がれていた。雨でどろどろになったヘドロの土を、港に向かって歩く。5丁目から築港通りにかけて、ほとんどの家は基礎しか残っていなかった。小学校前の道路を南に向かって歩く。中学校周辺は構造上水がひかないため深いところでは膝ほどまで冠水していた。

3月17日、道が瓦礫で塞がれてしまっていた。

3月18日、海岸の堤防が津波にごっそり持って行かれていた。

2. 3・31に慌ただしく修了式・離任式、そして転勤…

○ 3月25日の打ち合わせメモ(互理中)

*一斉赴任日は4月13日(兼務発令は申請済み)

*人事異動の新聞発表はナシ

*荒浜中学校は3月31日、10時から修了式および離任式(互理中1階OSにて)

*長滞小学校は3月31日、13時から卒業式および修了式、離任式(互理中1階OSにて)

*荒浜中学校は逢隈中の体育館を教室として使用する方向で検討。4月20日までは会議室を荒浜中学校職員室として使用する

*避難所での生活は当面続く

3. 4月1日、荒浜中学校へ…明日が見えない

○ 4月1日の打ち合わせメモ

*逢隈中の3階教室を使用して学校を再開する

*タイムテーブルは逢隈中と合わせ、行事も可能な限り合同で実施する

*4月4日の午後から分掌ごとの顔合わせを行う

*必要備品のリストアップを

*在籍生徒数は129名

- *教室の環境等の整備(机、椅子、教科書、副読本、制服、ジャージ、運動靴、上靴、部活用具)
- *通学路の点検、危険所調べ
- *避難所へ朝ごはんの時間の変更を要望
- *1学期の指導主事訪問の中止
- *安全で健康な勤務態勢を
- *1学期は4月25日～7月29日、2学期の始業式は8月22日
- *4月11日を登校日にする
- *入学式の時刻・場所
- *学校行事の検討(修学旅行・運動会・街道を歩く会等)
- *4月27日～5月2日は簡易給食
- *「荒浜中学校」の片づけ・清掃、机・椅子の運び出しは4月7日
- *ノート・鉛筆、上靴等の物資の配付は4月16日(土)と4月17日(日)
- *紛失した現金の会計処理
- *郡教研は休止の予定

4. 4月下旬の新年度、生徒たちと出会う

○ 4月25日の始業式(披露式)でのあいさつ

長い長い春休み、教員になって初めて経験しました。今日から新年度がスタートするわけですが、みなさんはどんな思いで今日を迎えたのでしょうか。昨日、荒浜へ行ってきました。道路をふさいでいた瓦礫も徐々に撤去され、新しい電柱を積んだトラックも走っていました。テンポは決して速くはないですが、懸命な作業が続いていますから、いずれライフラインも復旧すると思います。しかし、「復旧」と「復興」は違う。道路が整備されたり、家が補修されたり、水道や電気を通ったり…することを「復旧」と言うとするれば、「復興」とは人と人とがつながることだと思います。これは、16年前の阪神淡路大震災や7年前の新潟中越地震で得た貴重な教訓です。4月11日の臨時登校日の時にも話しましたが、「荒浜復興」に向けて希望があるとすれば、みなさんがこの荒浜中学校に在ることでもあります。新年度スタートのこの日を荒浜復興のスタートに位置づけて、励まし合い、支え合って荒浜中をつくっていかうではありませんか。

○ どのように授業を構想したか

4月1日時点で129名在籍していた生徒は、始業式の時には101名になっていた。多くは避難所(逢隈中学校の体育館)での生活だが、隣の岩沼市や名取市、あるいは仙台市から通学している生徒もいる、槻木町から片道10kmの道のりを自転車こいで通学してくる生徒もいる…。

新年度スタート当時は、制服で登校する生徒、学校指定のジャージで、あるいは私服で…と、逢隈中学校の3階はみんなまちまちだった。それでも学校はちゃんと機能していたし、教職員の中に「取り締まろうという姿勢」は微塵もなかった。

生徒たちは筆舌に尽くしがたい、辛い経験をしている。親や親戚を津波で失った生徒もいる。私は3年生の国語を担当することになったが、震災当時に生徒たちと関わりを持っておらず、人間的な関係を築けていない彼らに軽々に被災の状況を書かせるべきではないと思った。ただ生徒たちの様子から学校が再開されたことを喜ぶ雰囲気を感じられたこともあり、互いの思いを交流することは意味のあることだと思った。

○ 国語科通信「港のある街」を発行する

最初の授業(4月27日)で「なぜ『ことば』を勉強するのか」ということについて話し、感想を書いてもらった。生徒たちはその話を真正面から受け止めて感想を書いた。7名の文章を国語科通信「港のある街」に載せて5月6日に読み合った。

太田千草^{さん}は「私は話す事が好きで、友達や家族とコミュニケーションをとる時間が楽しいと感じます。でも時々、何気なく言った自分の一言が相手をひどく傷つけてしまったり、あるいはその反対もあります。この事は、今回の震災でよく分かった気がします。たたかれたり、つまづいて転んだりしてできた傷よりも、ことばは凶器と化し、酷い痛みになることも知りました」と綴っていた。私は次のように話した。「被災後の生活が一変して、みなさんも相当ストレスがたまっているんじゃないか。なかなか思うようにならずに、むしゃくしゃした気分が陥ってしまったり…。大人も全く同じだ。『なぜこんなことも分からないのか』『冷静に考えればこうだろう』というような家族間でのぎくしゃくした会話があったのかもしれない。あるいは逆に言われたことがあったのかもしれない。…この文章には根拠がある。荒浜の中学3年生が書いたという根拠がある。そして、3・11をくぐり抜けた中学生が書いたという根拠があると思う」と。

この文章に触れ、加藤登紀子が震災直後に発信した「今どこにいますか」という曲を生徒たちに聴いてもらった。

今どこにいますか

加藤 登紀子

今どこにいますか／寒くはないですか／お腹はすいてませんか／
眠る場所がありますか／誰かと手をつないでますか／
暖かな火はありますか／誰かを胸に抱いてますか／
青い空を見上げてますか／大きな悲しみは嵐のように／
突然に訪れるけど／夢じゃない何もかも／
ほんとうのことだから／今日一日を生きましたね／
あしたのために眠りましょう／かなしみはあなたの胸で／
大きな愛に変わるでしょう／
できるだけことをしてそれでも足りなくて／
悔しさに泣けてくる／どうしようもないことばかり／
地団駄を踏みながら／泣きたければ泣けばいい／
大きな声で歌えばいい／みんなで笑い合えばいい／
子どものようにころげまわろう／あしたは来るかならず来る／
太陽はまわってる／出来ることをひとつずつ／
またひとつ積み上げて／泣きたければ泣けばいい／
大きな声で歌えばいい／みんなで笑い合えばいい／
子どものようにころげまわろう

震災直後から「がんばろう互理」「がんばろう宮城」「がんばろう東北」という桃太郎旗が店頭にはらめいている中で、荒浜中学校の生徒総会の議案書の裏表紙には「みんな『頑張れ』ってゆうけど、もう十分がんばったよ」と書かれてあった。



○ 中島みゆきの「永久欠番」を学習して

震災により先輩を失った武者慶士君は「大好きだった先輩は自分の心の中に生きている」と綴った。震災後2か月を経て「現実をしっかり受けとめ、尊敬していた先輩の分まで野球をする」と書いていた。「たとえ宇宙で人は忘れられないとしても、私は亡くなってしまった人のこともできるかぎり覚えていたいと思います」と書いた渡邊千晴^{くん}は、今回の震災でお父さんを亡くしている。「人の命の大切さ、それよりも人の思いや心の大切さを考えさせられました」と江戸亜加音^{くん}。実際に津波を目撃した鈴木萌里^{くん}は「この時は震災の起こる前だったらあまりきょうみはなかったと思います。でも、今はすごく心に響き、とても大事なことだと思いました」と。南條広志君は「この大地震で思ったこと。赤ちゃんからおじいさん、おばあさん達、たくさんの人々が亡くなった。そのことで今生きていることに感謝しないとだめだと思ふ」と。

これらの表現の端々に生徒たちの思いが表出されていると思うし、その表現に共感する生徒も多いのではないかと思った。

○ 「俳句を味わう」を学習して

「俳句を味わう」を学習しての鑑賞文で、直接震災に触れていたのは塚辺みのり^{くん}で、まだ立ち直れない人たちに「春風や闘志いだきて丘に立つ」という高浜虚子の俳句を届けたいと書き、「私達の学校、荒浜中学校も必ず復興する時がくる。それはいつになるかは分からないが、お世話になった自分達の学校を少しでも早く取り戻すため、闘志をいだいて頑張っていきたい」と綴った。

また、「体が動かず、外の雪景色を見られないようなかなりのストレスというものを持っていたのにも拘わらず、なぜ生き続け、俳句も書き続けられたのか。寝返りもうてないくらいの痛みがあるのならば、生きる希望を失うのが普通ではないだろうか」と疑問を呈した小野次朗君は、「俳句を書くという自分の楽しみを続けるために、苦しみを味わうことを選んだ。本当に彼はすごい。まさに『病床の偉人』である。彼は俳句の偉人だけではなく、人生の偉人だ。そんな彼を私は見習いたい」と。7年間も病床に伏しながら俳句を作り続けた正岡子規の生き方に共感を寄せ、逆境にあっても前向きに生きていこうとする姿勢が生徒が書いた文章から窺えるのではないか。

真正面から震災をテーマにした文章を書かせているわけではないので、部分的だったり、単発的だったりするが、そこに記された生徒の思いを大事にすくい上げて、それぞれの思いをつなげることが私の仕事だと思っている。単に「がんばれ」というメッセージを送るのではなく、子どもたちの表現に寄り添いながら中学校生活最後の1年を送るその時々のあるままの思いを拾い集め、その内面に共感することを大切にしていきたいと思った。生徒が文章を書き、それを読み合い、思いを交流することを通して、事実を正確に見極めること、人と人との関係性を豊かにとらえること、生活や社会の仕組みを見抜く力を養うこともめざしていきたいと考えた。

5. 夏休みの課題に震災が綴られる

夏休みの国語の課題として、意見文か読書感想文のいずれかを課した。夏休み後に行われる弁論大会、読書感想文コンクールにむけて校内審査を行うためだ。

3年生34名のうち、意見文を書いたのは15名、読書感想文を書いたのは13名だったが、14名が何らかの形で震災と向き合っていた。それらの中から5名の作品を「港のある街」に掲載して読み合った。3・11の生々しい描写とともに、5か月が経過してある「いま」の意義が記され、これからどのように生きていこうとするのかという決意がしたためられていた。文章の稚拙さや掘り下げ方の甘い点などもあるが、まだまだ整理がつかない段階での生徒のことばを紡いで交流することに意義があると思った。

6. 「学校の復興に関する保護者の意向調査」が行われる

互理町教育委員会が下記のような意向調査を行ったのは9月下旬だった。延期になっていた修学旅行が実施されたのは9月20日～22日だったので、3年生の保護者には26日に配付された。

学校復興に関する意向調査

このたびの東日本大震災により沿岸地域では甚大な被害を受け、小中学校につきましても被災し、現在、利用できない状況となっています。町では、被害の大きかった荒浜地区及び吉田東部地区について、堤防・防潮堤や二線堤(道路を嵩上げ)など多重防御によるまちづくりに対する町の考えを住民との意見交換会(8月実施)で提示しました。その際、津波被害のありました学校について下記再校案を説明しています。つきましては、現在通学させています学校の再校案についてお答え願います。

学 校 名	再 校 案
荒浜小学校	現校舎は周りより約1m以上盛土された土地に建っているため、津波による浸水は60cmくらいで、校舎1階の被害が少なかったことから、校舎を修繕し、現在の場所で再校する。
長瀬小学校	現校舎西の盛土のされた土地に建てられた体育館は、ほとんど津波被害がなかったことから、この敷地内に新たに校舎を移築する。
荒浜中学校	津波による浸水は2m以上であり、被害が大きかったことから、現在の敷地に盛土をし、高床式のような構造で校舎を再建する。
吉田中学校	津波による浸水は30cm以下であったことから、一部校舎を修繕し現在のままで再校する。(すでに一部修繕し再校)

★各学校の再校後は、津波等の災害時に地域住民の皆様の一次避難所として活用し、毛布や水などの備蓄機能も強化する考えです。

再校案としては荒浜小・中ともに現在地に校舎を建て替えるというもので、荒浜中については「現在の場所に盛土し、高床式構造で再建」するという案が示された。そのことについての意見を保護者に求めて復興計画に反映させるという趣旨である。

それとは別に、町民との意見交換会では鳥の海周辺、および阿武隈川沿い50メートルを緑地帯にし、荒浜小と荒浜中の間に住宅地を設けるという案も示されていた。堤防の復旧や防潮堤の新設も計画されているが、そのすべてが完成するまでには相当の時間が必要だろうと思われる。

そう考えると復興のスパンは1年や2年ではないと思われる。10年ぐらいかかるかもしれない。保護者の意向調査を行うことは当然だとしても、復興の主体は間違いなくいまの中学生や高校生の年代ではないか。復興計画はこの時点で「現在進行形の課題」だが、今後の生活設計に関わる重大な課題でもある。太田千草さんが、夏休みの課題の中で「大震災をもとに天災に備える」必要性を強調していたが、学校の問題だけでなく、「荒浜の復興」をどう考えるのか。国語の学習(意見文)に位置づけて、現時点での生徒の考えを交流できれば…と考えた。

町内小中学校の再開について

小中学校の児童・生徒の親を対象とした、「学校復興に関する意向調査」の集計結果は下記のとおりです。本町では、「再校案」を基本に、小中学校の環境整備を行い、国・県・町の防御施設の整備状況等を踏まえ、早期再開を進めていきたいと考えております。

学校名	再校案
荒浜小学校	現校舎は周りより約1m以上盛土された土地に建っているため、津波による浸水は6.0cmくらいで、校舎1階の被害が少なかったことから、校舎を修繕し、現在の場所で再校する。
長瀨小学校	現校舎西の盛土のされた土地に建てられた体育館等は、ほとんど津波被害がなかったことから、この敷地内に新たに校舎を移築する。
荒浜中学校	津波による浸水は2m以上であり、被害が大きかったことから、現在の敷地に、高床式のような構造で校舎を再建する。
吉田中学校	津波による浸水は、30cm以下であったことから、1部校舎を修繕し現在のままで再校する。(既に一部修繕し再校)

◇ 意向調査結果 (抜粋)

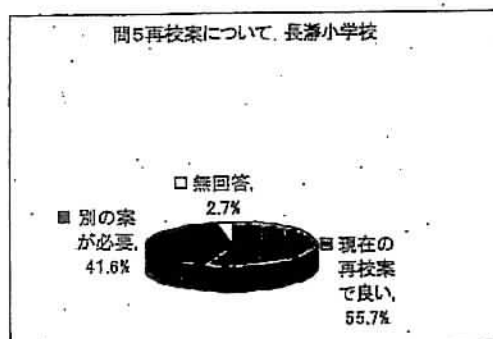
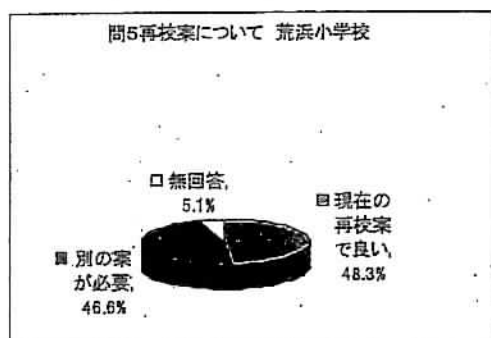
問5 各学校に対する現在の再校案についてお答えください。

【荒浜小学校】

118/124 回収率 95.16%

【長瀨小学校】

149/159 回収率 93.71%

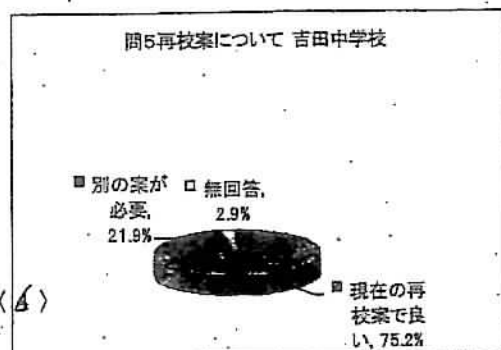
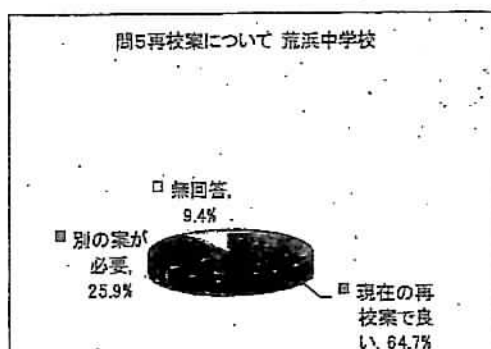


【荒浜中学校】

85/103 回収率 82.52%

【吉田中学校】

105/109 回収率 96.33%



くなつた人達には町の復旧を見守つてほしい。報告したいと思う。

今はもう町は何もなく、がれきの山で、私自身も3月11日から時間が止まったままだ。でも、確実に前へ一歩一歩進んでいる気がする。私は今年受験生だ。来年の3月には「合格」の二文字で笑っているといいな。

あの日はみんな地獄で、一

不安もあるけど、前を向いて生活していく

震災を経験して
江戸亜加音

それは突然の出来事だった。卒業式の午後。私は家にいた。長く続く強い地震は、今までに経験したことのない恐ろしい揺れだった。余震が続く中、防災無線は私たちに教えてくれた。「大津波警報が発令されました。高台に避難してください」と。

その時、私の隣には足の不自由な祖母がいて、身動きが取れない状況にあった。そこへ母が職場から駆けつけ、私たち家族は避難することができた。避難といつても一時的なものだと、私が、誰もがそう思っていた。だから、私は何も持たずに、火の元の点検と家の鍵を開けて急いで乗っ

一人語りきれないそれぞれのドラマがあった。あの日のことは一生忘れないで語り継がれていくだろう。

今、私は親戚の家へ身をよせている。家をどこに建ててかが家族の課題になっている。私は今、「ありがとう」という言葉をみんなに伝えている。「生きててくれて、ありがとう」。

た。それが、私が大好きな家を見た最後だった。

それからの生活で私にとって一番辛かったのは、電気がつかないことやいつまでも続く余震に耐えることより、自分の家に帰れないことだった。当時私たち家族は、角田市にある親戚の家に避難していた。そこへは同じく津波で被災した家族も避難していたため十四人での生活だった。いくらか親戚とはいえ、気を遣うもので「はやく家に帰りたい」と思っていた。

あの地震から一週間たった頃だろうか。私は家に帰った。しかしそこには、今まで生活してきた平和な荒浜ではなく、津波によって豹変した荒浜の姿があった。一週間前には普通に家が建ち並んでいた

場所に瓦礫が集まり、今までの面影はなかった。信じられなかつた。涙も言葉も出なかつた。果然と立ちつくしたまま「夢であつてほしい」と思つた。しかし、今までずっと弾いてきたピアノがひっくり返つている姿、家の中にあつたどこかの家のタイヤなど、一つ一つ見るたびに突きつけられた気がした。「これが現実なんだよ」と。

それから日が増すごとに、私は見たことのない光景を、荒浜に行つたときには必ずといっていいほど見るようになっていった。私の視界には何台もの重機が映るといふことだった。重機はバキバキという耳を響かせるような音を出し、民家を壊していった。赤旗を立てた家はすぐに取り壊され、数日の間に隣の家や近所の家がなくなつていった。民家は数えられるくらいの数になつていった。

ついに、私の家も解体される日が来た。まさか家を、私たち家族の判断で壊すとは思つてもみなかつた。それは辛い決断だった。最後に家の中に入り、家族でお別れをした。「ありがとう」という感謝の気持ちを抱いて。父が泣きながら赤旗を立てた。私も母も涙が止まらなかつた。私は家が壊されるのを見たくないと思つた。でも、今まで私

を、家族を見守つてくれていた我が家を、最後まで目に焼きつけておかなければならぬの詫言に感じた。そんな思いとは裏腹に轟音を立てて家は取り壊されていった。心にボツカリ穴が開いたようで、今まで一番辛い一日だった。

切さ、食料や水、電力などの大切さ。助け合う心、そして命の大切さ。私は未だに思うのだ。もしあの時、母が来てくれなかつたら、もし家について避難しなかつたら……と。今、私が笑つたり話せることとはとても幸せなことだと思つた。こんなこと、今まで突感したことなかつた。震災が教えてくれたのだ。

それでも私は決して忘れない。毎日歩いた学校への道。荒浜での思い出。過ごしてきたからこそ分かつた大好きな荒浜を。

この震災で失つたものは数え切れないほどある。でもその中で、分かつたこともたくさんある。今までに感じたこととのなかつた家族や友達の大

一人ひとりがかけがえのない存在だ

「ドアD」を読んで
鈴木 萌里

「もし、あなたがあなたの仲間と誰かが死なないと出られない個室に閉じ込められたら……?」あなたは自分の死を選びますか? それとも誰かの死を選びますか? あなたはどちらを選びますか?

強く印象に残つた場面がありました。七つの部屋それぞれ生死をかけたバトルという場面です。それだけの部屋によってガス死、溺死、爆死、毒死など仕掛けが違うのでとても怖かつたです。

もう一度読むきっかけになつたのは、津波で被害を受けた部屋を掃除しているとき、たまたまこの本を見つけたから、中学一度読んでみるら、中学一度読んだときは遠く感じてました。それは人の命の重さです。一年生のとき、命についてそれほど考えてい

た部屋を掃除しているとき、たまたまこの本を見つけたから、中学一度読んでみるら、中学一度読んだときは遠く感じてました。それは人の命の重さです。一年生のとき、命についてそれほど考えてい

ませんでした。でも今は、改めて感じさせられるありえない出来事が起きました。

それは三月十一日に起きた巨大地震です。その日はきれいな町、たくさんの人、たくさんの家族、全てがまだそろつていました。なのに、あの時間が、二時四十六分。全ての歯車が狂つてしまひました。今まであつたはずの家、さつきまで生きていたはずの人、全てがああ津波によつて流されてしまひなくなりました。

その人たちは今もまだ生きています。今も家族と笑い合つたりしているはずだつた。なのに、何をしただつて戻つてくることのない命。せめてもう一度、もう一回だけこの人たちが生きることができたらいのと思つてしまひます。描かれるはずだつたその人の未来を想うと胸が苦しくなります。

「ドアD」でも、生きたくても誰かが死ななければ開かない扉。本を讀んでいて強い怒りを感じました。その部屋は誰かが作つた人工物。誰かがたくさんの人の命を奪うために作った環境。人の命を操ることに強い怒りを感じました。

最近、殺人事件がどんどん増えてきています。命の重さを分らない人たちが多くなつてきているのだと思ひます。人

が人の命をなくすということがあつてはいけないこと。それを知らない私たち若者。戦争を知らず、命の重さを知らない人たちが増えているこの世界がこれからどうなるか不安だつた。そんななか、津波が命の重さについて教えてくれました。津波は決して良いことではないけど、今回のこの現状を受けとめ、それを生かしていくことが大切だと思ひます。

「ドアD」での仲間同士での醜い争い。だれだつて人は自分が一番です。特に命に関わつてくるとどんな人だつて自分を選びます。なにが正解なんて誰にも分かりません。それでもあなたは他の人を守りますか？ それとも自分自身を守りますか？ あなたはどちらを選びますか？

震災でも人と人との間で醜い争いがありました。人の悪口を言ひ合つたり。人間は本当に愚かです。一人では何もできないのに強がつて他人を蹴落とす。でもさくつと一人ひとりの力は小さくても、その力を合わせれば不可能だつて可能にして進んでいける。私はそう信じています。

「ドアD」でも震災でも助け合つている場面は争ひよりも何千倍も多いです。人はさくつとそこにいるだけいい。あなたがそこにいる

だけで幸せになれる。あなたが笑えばみんな笑う。私たちは人の輪の中で生きています。その中の一人が消えたら、みんな涙が流れます。一人が誕生したらみんな笑顔になります。一人ひとりがかけがえのないものなのです。この間より軽くなつておるおじいちゃん、おばあちゃん。意外と重い赤ちゃん。命つて

荒浜は私の故郷に変わりはない

記憶 太田 千草

私は一生忘れないと思ひます。当たり前の日常を、暮らしを、多くの命を奪つていったあの日を。普段と何ら変わらない屋下と共に、突き上げるような激しい揺れ。割れる皿の音。地面から吹く大量の水。全てが事の大きさを物語つていました。

母に手を引かれて避難した小学校の屋上から見た光景。あまきついでいます。流れゆく人、物、壊れた車から鳴り続けるクラクションの音、鼻をつく重油の臭い。ああ、これは夢だ。夢なんだ。だからもう目を覚ましてよ。お願い

計れないし、宝石みたいに輝いているわけでもない。命つて。今日も笑う。今日も食べられる。寝ることができる。泣くことができる。あたりまえの生活ができる。それだけで幸せだと思ひました。あなたは何を選びますか？ あなたは幸せを選びますか？ それとも。あなたはどちらを選びますか？

だ。そう心の中で呟くと、無情にも冷たく切るような風が頬を伝ひ、とても切なかつたのを覚えていて。翌日、自宅近くに足を運んだ父の一言は「家は全部流されたよ」でした。それを聞いたときの絶望感と、同時に自分が「被災者」であることの事実を突きつけられたことは重すぎたのです。気がつくとも涙が出てきていました。

思い起こせば数年前、ハイチの大地震やスマトラ沖の津波が日本でも大きく報道されました。その映像は酷いものであつたけれど、私はただ「世界では大変なことが起こつてゐるんだ」としか感じず、他人事のように思つていました。数年後の自分の身に何が起ころうとも知らずに。それなのに今、私は助けを求め必死

に叫んでいる。自分の薄情さに初めて気付いた瞬間でもあり味。未曾有の大災害を経験して私がまず伝えたいこと、それは何処かで災害が起ころる前に、この大震災をもとに天災に備えるということ。自らや家族に何かがあつてからでは遅い。決して私達被災者の現状を他人事と思わないで下さい。

もう一つは、心の絆です。今までたくさんの人に支えられたからこそ、私達はこの間に居るのです。辛いときも誰かが支えてくれたことでしょ。この現状から立ち直るには時間がかかつたけれど、私は家族や友人、先生方や支援を頂いた方々などのお陰で、今こうして笑つていられます。温かい心の絆はどんな底から人も救うことができます。そう信じてなりません。

こうして笑顔になれる今でも、あの津波さえなければ。海を見ただけで憎しみさえ沸いてきます。なくしたものがあまりにも多すぎたからなのでしょう。確かにそうです。それらはどんなに叫んでも、泣いても戻つては来ません。しかし、震災によつて得た物

物もありません。この経験の後世に伝える義務、絆、友情、人の温もり。目には見えな

いけれど大切なものです。失ったものだけではありません。かつて壊滅状態だった私の故郷も復興への道を歩み始め、少しずつ前へ進んでいきます。一筋の光が射し、ゆっくりではあるけれど元に戻りつつあるあの地は一生私の故郷であり、それは変わりませんがもう二度と悲しいことが起こらぬように、私自身の記憶を語り継いでいきたいです。だ

優也は俺の自慢の「心友」だ

「心友」優也
武者 慶士

俺にはかけがえのない親友がいる。小さい頃、朝から日が暮れるまで僕は親友と白球を追っていた。「打って、守って、走る」そんな野球とゆうスポーツの魅力に僕は惹かれていった。

スポ少の練習では、いつも僕と親友優也は、一番にグラウンドに行っていました。アツくストレッツもせず、着くと即座にキャッチボールをバテてしまい二人でお説教されることもありました。午前中で野球の練習が終わったのにもかかわらず、また午後も野球をするためにみんなを誘い、一日中野球をして

から忘れません。一生忘れません。心の交流を通して知った温もり、災害への心構え、たくさんのご支援。そして、辛かったあの日。それは深い傷をえぐるように残していつてしまったけれど、今なら心から笑うことができます。誰かが辛いときは笑顔を見せてあげたいです。復興への道を明るく照らす一筋の光のように。

いることが頻繁だった。それだけ僕は野球が大好きでした。

上級生になると僕達二人はチームの主力になり、優也はピッチャー、俺はキャッチャーとして僕達はバッテリーとなりました。

エースの優也は決して速い球や球威のある投手ではありませんが、制球力のある投手で、構えた所にしっかりと投げ込める器用な投手でした。

そんな優也と中学でもバッテリーを組むと思っていたのですが、僕の転校で学校も別々になってしまいました。中学に上がる前、そのことをずっと引きずって沈んでいた僕に、気を遣ってくれた親友優也は声をかけてくれた。「俺

と武者が勝負するときは、全部ストロートの真つ勝負だかな！ 覚悟しとけよ！」と顔を赤くし、照れ臭そうに白い歯を出し、僕の方を見てニコッと笑みをこぼしました。予想外の一言は、フッとていた僕の気持ちを引きずらせてくれた。そして、「今度は良いライバルとして頑張るんだ！」と、気持ちに一区切りできました。

中学に入り、それぞれの仲間と時間を過ごし、それぞれの色々な思いをしながら最後の中総体を迎えました。

しかし、中総体前の大震災で僕は家をなくし、街をなくし、たくさん辛い思いをした。苦しい思いもした。そんな時、優しく一番に手を差し伸べてくれたのは優也でした。突然の出来事でショックを受けていた俺に、優也は「ここは俺の家であつて、お前ん家でもある。いつでも帰ってきていいんだよ。お前は俺の親友であり、家族だからさ」と、これ以上ない優しい言葉で、僕の目にきらりと光る滴が一気に溢れ出し、嬉しく

五名の人たちが原稿用紙を一文ずつ埋めていく作業は相当辛かったに違いない。

震災を題材にした作品は予想以上に多く提出された。大和田尚吾君は「学校は楽しいところだと再認識した」とし、併せて現代社会の脆さを指摘している。小野次朗君は津波対策と原発の安全性について言及し、伊東真菜君は震災復興との関連で、高齢化社会で自分たちが果たす役割を考えられている。「人と人との絆」と題した南條広志君は「近所同士、友達、支援」の三つを挙げ、特に木村拓哉君の荒浜中復帰を「跳びはねるくらいうれしく、野球がさらに楽し

くなつていった」と、ふりかえった。「前を向いて歩いていかななくてはならない。やるべきことはたくさんある」と書いたのは片岡伸行君。菊地絵梨奈君は、「避難所での子どもたちとの関わりを通して保育の仕掛けにも興味をわいてきた」と綴っている。恵まれた環境とは言えない避難所生活を通して進路観を耕すエネルギーに変換している姿勢は実に素晴らしいと思った。

震災以外では「人間は大切な人のためなら強くなれる」と思ったと、小野諒二君は読書感想文の中で述べている。「風が強く吹いてくる」を読んだ菊地善彦君は「僕もみんなのために努力をし、自分の限界に挑戦しようと思った」と書き、志賀雅大君は「人は努力をすれば夢はかなわずとも、一歩でも多く夢に近づくことができる」と、深澤沙羅君は「かつて暮らしていた場所を破壊するヒトの自分勝手な許されざる行為を今回の大震災のようなかたちで大自然はいましめるのかも知れない」と自然破壊に警鐘を鳴らした。自然の破壊、それは人類の自滅に通じる道でもある。渡邊千晴君は「これでよかったのだろうか。そんな風に後悔しないようか。これから私も受験勉強に向かってゆくと力強く文章を結んでいる。」

三月十一日の東日本大震災による津波で互理町は甚大な被害を受けた。死亡者数二五五名、行方不明者数七名、負傷者数四四名、全壊家屋二〇五〇棟、大規模半壊家屋一六〇棟、半壊家屋三八三棟、一部損壊家屋一一四棟、浸水面積は約三五五畝で互理町の面積の47・8%に相当する。水田の浸水は一八二六ha、畑の浸水は二九九haにのぼり、漁船八四隻のうち八二隻が流されるという壊滅的な打撃を受けた。

あの日から今日でちょうど七か月目を迎える。修学旅行から帰った九月二六日、「学校復興に関する意向調査」(保護者向け)が配付された。互理町当局は、当面十年のプランで復興計画を策定する意向で、いま震災復興会議で議論されている最中だ。道路が整備されたり、水道や電気が通ったりすることを「復興」と言ひ、それは、「復興」とは人と人がつながることだ。これは十六年前の阪神淡路大震災や七年前の新潟中越地震から得た貴重な教訓だ。十年後に二十五歳になるいまの中学三年生の世代の存在を抜きにして、荒浜復興はあり得ないとボクは思う。いまの段階で荒浜の復興を展望することは簡単なことではない。それを承知の上で荒浜中三年生の本音を綴ってもらった。

それでももう一度荒浜に戻りたい

大好きな荒浜中学校

星 瑞希

私は荒浜中学校が大好きです。荒浜全体が大好きです。でも、三月十一日の大震災のせいで私の大好きな荒浜中学校と大好きな荒浜全体は、ぼろぼろにこわれてしまいました。十一月、私は心の中で泣いて、「荒浜復興なんて無理じゃない」と思いました。

こうして大震災から半年が過ぎました。私は父のほかまわりのあと、荒浜中学校をみに行きました。まわりはほぼ、何もありませんでした。「パパ、荒浜復興、無理だよ」と心でつぶやきました。

二十六日、私は学校復興に関する意向調査のプリントを

もらいました。母と姉と三人で話し合いました。「荒浜復興は、やっぱり無理じゃない」となりませんでした。でも私は、荒中生は荒浜にある中学校にいてほしい。三月十一日の大震災で私は思ったことがあります。それは「荒浜がなげれ」。

たくましい家 武者 慶士

正直、今は地元荒浜のことについて考えたり、思い出したりするのが辛い。3・11から半年が過ぎた今でも、大津波の残像が頭から消えない。自分の家の方からみえた白い大きな水しぶき。そんな状況で、被災人の僕達が復興のこ

とを考へるのは心が痛んでしまう。でも、前へ進まなきゃいけないのは自分でもわかっている。

僕の家は川沿いで被害が一番大きかった地区だった。しかし、家は奇跡的に残った。でも、津波の威力はすさまじいものであり、僕の家の周りには家の基礎だけを残し、本体の家の部分が残っていないかった。

今互理町では、五丁目や四丁目、築港などを堤防地域にするため、家が残っていてもそれを壊し、荒浜中付近に住宅街を作ろうとしている。しかし、数百メートル場所をずらしたことで、あの津波を防ぐことはできないと思う。もし荒浜中付近に住んだとしても、津波が絶対来ないとは言えない。それに、田んぼをうめ立ててから住宅を建てる

ことになったら、それなりの時間がかかる。ならば、自分はまだ残っている自分の家に戻りたい。

あの家での思い出は一生消えない。たまに荒浜の街を見に行く。元々は僕の家の近くには数百軒の家が並んでいた。あんなにあつた家がもうどこにもない。だから、津波にたえた僕の家がともたくましく見えた。僕は心からこの家に「ありがと」と言いたい。僕はこの家が好きだ。だからもう一度戻りたい。本当の自分の家に……。

思い出深い荒浜 志賀 雅大

あの日からもう半年以上が過ぎていた。時はあつという間だ。あの日から荒浜中学校での勉強ができずにいた。だけれど今、高床式構造で再建という案があることを知り、僕はその案に賛成だ。

だが、少し不安もある。またあんな津波があり、その時には大丈夫なのか、と考えるにしまう。だがその一方で、二年間通い続けてきた学校でまた勉強がしたいというのが自分の気持ちである。

被災した人の中には「また住みたい」と言う人もいるが、「またあんな震災がきたら怖い」などと言ひ、「違う場所

互理町立荒浜中学校
第3学年国語科通信

No. 18

11, 10. 11



住む」という人もいる。多分、違うところに住むという人がほとんどだと思う。だが、住むという人もいると思う。僕はもちろん、思い出のある荒浜でもう一度住みたいと思う。

荒浜復興について

向後 佳奈

私の家族は、荒浜復興につ

いて一度話し合ったことがありました。荒浜復興に何年も日にちを重ねていくと思うので、私のお父さんとお母さんは「なんとか荒中で卒業式できたらいいのねえ」と言っていました。それに私も同じ意見でした。今まで通っていた学校で卒業ができないと考えると、複雑な気持ちになります。

でも、何年もたつてしまつたら少子化も進んでいるし、被災地ということもあって、住む人は激減すると思いません。そのことも考えると、内陸の方に立て直した方がいいのかなあつて思つたりもしました。

でも私的には、高床式構造で今の場所ですべて再開し

まだまだ消えない津波の恐怖

復興にあたり 小野 次朗

今荒浜には、どのくらいの人が残っているのだろうか。恐らく数えられるぐらいしかないだろう。

人が残らない理由は、まだ堤防ができていないから。それが一番だろう。しかし、堤防ができたからといって人は戻ってくるだろうか。少なくとも私は戻らない。海ぞいに

てほしいと思いました。

復興に向けて 大沼 建人

僕は、荒浜が復興しても人がもう一度住むのはどうかと思う。それは、また次に地震が起きたことを考えての理由だ。だれもがまた荒浜に住みたいと思つていられる方が、やはり少し怖いと思う。僕は千葉県の高校に行つてしまつて、少し他人事のようになつてしまつてもいいが、また元の荒浜に戻ることを見待している。復興には何十年もかかつてしまつてもいいが、それまで我慢してまた荒浜に住みたい。

あることによつて、また津波を心配しながら生きていかねばならない。たとえ私たちの代で津波が来なかつたとしても、子孫たちはどうなるだろうか。海ぞいにあるだけで、津波の恐怖から逃れることはできない。

また、町の中心部から離れていふという場所にあるため、仙台に行くためには互理駅に行つてから電車に乗らねばならない。この便の悪さからも、荒浜を拠点に仕事に行

くという人は少ないだろう。これらの問題がある以上、ただで人が戻るはずがない。そのため、荒浜独自の産業を産み出す必要がある。もともと荒浜は、いちごで有名である。堤防をとでも高くしたあと、被害を受けたいちご農園を直すことが大事であると考えられる。そして、再びいちごを使った産業で全国に名を残すことによつて、人口が荒浜に戻るだろう。

荒浜復興 島田 瑞樹

自分は、荒浜がたとえ復興したとしても、荒浜に住みたいとは思わない。理由としては、また東日本大震災みたいな大きな地震がくることを考えると、荒浜に住むという考えはでてこないと思う。

実際に自分は津波を見ていないからよくわかんないけど、また荒浜に住むということは、多分東日本大震災の残像がのこつて、不安でいっぱいになると思ふ。荒浜にいた人は自分と同じ考えをもつていふ人がたくさんいると思ふ。しかもまぢかに津波を見た人は、こわくて荒浜に住むという気持ちになることはない、自分はその思ふ。でも、荒浜の復興に反対する

わけじゃない。荒浜が復興して、前より良くなつて、町全体がよくなるのはいいと思ふ。いいと思ふけど、荒浜に人がもどることは、そうとうなことがないかぎり自分はないと思ふ。

荒浜の復興は難しい 南條 広志

ぼくは、この3・11の大震災で被害を受けた荒浜を復興するのは難しいと思ふ。なぜなら若い人達が荒浜に戻つてくる確率は低いからだ。若い人達はひっこし、都会に行つた人々が多いからだ。その逆に、お年寄り達は「荒浜に戻りたい」と言つていふ声がかかる。

お年寄りばかりか少しの若い人達の所に新しい荒浜小中学校を建てる意味はないと思ふ。どうせ建てるなら、若い人達が荒浜に戻つてもらうと建てる意味があると思ふ。たとえ十年、二十年かかつても……

これからの荒浜中学校 深澤 沙羅

この前「学校復興に関する意向調査」が配付され、荒浜中学校は「現在の場所に盛土し高床式構造で再建」という案が示されていた。

正直言うと、私はこの案に反対だ。互理町内の小中学校の中で一番被害を受けた荒浜中学校を、なぜ現在の場所に新しく再建しようとするのか？ 私は疑問を抱いた。理由は、また津波が来てしまつたら、また同じことのくり返しになるのではないかと思つたからだ。

私はこの経験をいかして別の場所に建てるべきだと思ふ。保護者も安心して子ども達を通わせることができる。もし、再建できる土地がないのなら、小中一貫校にする案も検討するべきだと思ふ。兄弟のいる家庭は一緒に避難できるし、親も子供の安否を確認しやすいからだ。

再建するにあつては、まずもとの荒浜の土地にどれだけの人がもどつてくるのかはつきりしないと決められないのではないか。

今後の「荒浜」について 江戸亜加音

今まで住んできた町「荒浜」の復興……。これは、私が、荒浜の住民が、人々が心から願つていふことだ。三月十一日までふつうに、幸せに暮らしていた荒浜から家がなくなり、あかりが消え、人々が姿を消した。家も

私と民教研

通信50号によせて

内藤 務

民研集会有るから日頃の実践の様子を記録したり写真に撮ったりする。毎日の実践をどうやったらどんな反応が返ってくるだろうか半分心配しながら待つ瞬間が好きだった。こちらの自分の思いが強くとも、子どもは敏感に感じ取って反応する。そして絵にもそれが表れる。

私の民研との結びつきは、東北民教研では、山形の東根集会有りであったし、教研では岐阜全国集会有りであった。山形での全国集会有りにも参加した。いつも「美術と教育」分科会であった。分科会の研究協力者は、いつも独立美術協会員の箕田源二郎先生だった。先生と仲間たちからは、民話の持つ歴史性や風土、楽しさ、豊かさ、誠実さを子どもたちに伝えて、そのことを通して絵に表現させること。そのことを通して美を追究することを学んだ。その民話はその土地のものならいっそう子どもたちの意欲を引き出せる、その土地の習慣や気候、自然など子どもたちが慣れ親しんだものであればあるほど最高の教材になりうるこ

とを先生と仲間たちで討議し検証させていった。

ひとり一人の子どもが描く作品一つ一つにどこか少しでもかわいらしい、やさしい表現があれば褒めてやり、子どもにも勇氣と意欲を沸かせることを忘れない。沖縄のシーサーのようないかめしい顔の中にドングリ眼の笑顔を持つ助言者であった。その先生ももういない。暑い真夏に開かれる民教研の休憩時間に真っ赤のトマトをほおぼりながら話す先生の顔がいまでも目に浮かびます。

仲間に批判され、励まされながらも楽しい集会有り参加することが私の最高の生き甲斐であり癒しでもあったので、

(目がよく見えないので、乱筆乱文をお許しく下さい)

山形県民教連機関誌

「山形県民教連通信」

第 50 号

発行日 2012. 2. 10

発行責任者 早坂 久佳

編集責任者 冨田 眞敏

事務局

山形市木の実町

山形県教組山形地区支部

書記局気付

TEL 023

631-2112